マンデー特報 Monday Report

良質な映画 より多くの人に

県内などで活動「熊本映画センター」

「国民に愛され喜ばれる映画を全国隅々まで届けます」をキャッチフレーズに、独立プロダクションの映画人たちと協力しながら良質な映画の自主製作・上映運動を展開している「映画センター全国連絡会議」（本部・東京）。「熊本映画センター」はその一員として、学校や地域のホール、団体の学習会などでの上映活動を行っている。（龍神恵介）

熊本映画センターの事務所。上映会のない日は資料作成や営業を行っている＝熊本市水前寺１丁目（小野宏明）

北海道から沖縄まで全国二十八カ所にある映画センターのうち、九州は熊本、福岡、長崎、宮崎の四カ所。一九七六（昭和五十一）年に発足した熊本映画センターは、主に熊本、鹿児島の両県を活動エリアとしている。

熊本市水前寺二丁目のビル一階にある同センター。

教育、人権、環境などテーマ

「子どもは感性豊かに」

専従スタッフは事務局長の木村雄一さん（62）と永田良明さん（59）の二人だけだが、ここは同市、人吉・球磨、宇城、山鹿、植木などの名画愛好家や鑑賞団体で組織する「映画センター熊本県連絡会議」（益田俊彦会長）の事務局も兼ねている。映画少年だった木村さんが、ハンセン病問題を扱った中山節夫監督＝合志市出身＝の「あつい壁」を見たのは高校一年の時だったという。

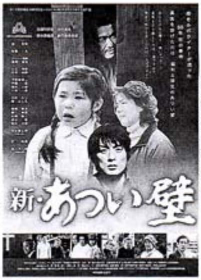
教育、人権、平和、環境問題…。こうしたテーマの映画が、学校や地域などからの申し込みや同センターの持ち掛けで上映される。苓北町職員組合のように、毎年夏に平和をテーマにした作品の上映会を行っているところもある。

「学校ではせめて１年に１回は上映会をやってほしい」と話す木村雄一さん

昨年一年間に各地で上映したのは計二十本ほどで約百三十回。中山監督の「新・あつい壁」と「ヘレン・ケラーを知っていますか」、靖国神社問題をテーマにした「靖国」、小林多喜二原作の「蟹工船」などだ。

「新・あつい壁」は二〇〇八年度後期の文化庁支援事業作品として今も全国各地での上映が続いており、熊本映画センターはこの二十六日に天草高校天草西校に行くほか三月にも鹿児島県出水市と宮崎市で上映会を開く。ちなみにこの映画が一昨年春に完成して最初に上映された場所は菊池恵楓園で、中山監督も来園した。

国内の独立プロの作品だけでなく、元米国副大統領のアル・ゴア氏が地球温暖化の危機を訴えた「不都合な真実」、米国の医療制度の暗部を描いたマイケル・ムーア監督の「シッコ」といったドキュメンタリーも扱った。



映画「新・あつい壁」のポスター

「教育委員会に予算化のお願いに行ったり、各地での市民レベルの実行委員会づくりなど上映の実現までには苦労もありますが、見終わって拍手が起きたり『ありがとうございました』と言われたりすると報われます」と木村さん。

学校での料金は小・中学生が五百円、高校生が六百円。遠方の小規模校にも出向く。「採算の度外視はしょっちゅうです。映画センターは企業であると同時に文化運動体ですから。劇団や楽団と違って、映画は機材さえあれば遠い所にも行きやすいんです」

映画センター全国連絡会議が資金協力などをする新作。今年は大人の引きこもりと農業問題を絡めた「アンダンテ～稲の旋律～」と国民の生存権を保障した憲法第25条がテーマの「日本の青空Ⅱ～いのちの山河～」が完成予定で、各センターがどこの上映会でも鑑賞できる製作協力券（一枚千円）の普及運動に取り組んでいる。

「いい映画は人生を考えさせ、記憶に残る力がある。特に子どもたちにはゲームとかに熱中するんじゃなくて、感性が豊かなうちに見てほしいし、大人たちにはそうしむけていただきたいと思います。私たちが小学生だったころは、学校が映画館に連れて行ってくれたものでした」（木村さん）。

「子どもの心に愛と希望・知恵と勇気を！」―熊本映画センターの事務所の看板には、そう書いてある。

▽熊本映画センター☎096（381）1214